

農村幼児保育に就いて

愛育研究所
敬養部 長

山下 俊 郎

農村の幼児保育は現在危機に面してゐる。戦時中、食糧増産の一翼を擔ふ大事な農村の施設として、あれ程宣傳され、助成されて來てゐた農村保育であつたが、終戦と共に大部分の農村に於て殆んど顧みられなくなつてしまつてゐるのである。昨年の農繁期は、終戦直後の虚脱状態に在つたからと言ふ事も出来やう、然し、今年春の農繁期にも、相變らず幼児保育は大部分の農村で顧みられてゐない有様であつた。これは決して好ましい状態ではない。私共は、農村の幼児保育を正しい軌道に載せて、正しい農村文化の發展を計る事によつて新しい文化日本の新建設の歩を進めなければならぬ。

その爲に、私共は農村幼児保育の虚脱状態の原因を探り、これに對處する途を考へて見たいと思ふ。

二

凡そ總ての存在したものが消失してしまふときには、その存在の理由が無くなつたから消失してしまふ筈である。今日

の農村保育がその姿を消してしまつたのには、果して消えてしまふべき理由があつたのであらうか。その存在の理由となり、根據となつてゐた事柄は果して消えてしまつてゐるのであらうか、私共はこの點から反省して見なければならぬ。

戦時中の農村には、戦力増強の爲の食糧増産といふ使命が課せられてゐた。農村の働き手たる青壯年が殆んど全部戦争に驅り出され、僅かに残つた老人と婦人によつて、この背負ひ切れぬ重荷を負はなければならなかつたので、農村母性たる婦人を増産に専念させる爲に、その手足まといたる乳幼児を保育するといふ事が農村保育の大きな使命であつた。所が、終戦によつて、食糧増産からは「戦力増強の爲の」といふ冠詞が省かれた。そして農村の勞働力は復員者が戦前と同じ様に擔當出來る状態になつた。農村婦人は戦時中の重荷から一應解放された。だから彼女等は、形式的に考へる限りに於ては戦時中程働く必要が無くなり、本來の母性の姿に戻つて我が子の保育に専念する事が出來る様になつた筈である。従つて、前に述べた様な意味に於ては農村保育はその必要が無くなつたといひ得るであらう。昨秋來農村保育が殆んど顧

みられなくなつたのは今こゝに辿つた様な論理づけと感情に基いてゐる様である。

だが、果してこの様な考へ方で農村保育は捨てられていゝだらうか。決してさうではない。考へを一應古い昔に戻して考へて見たゞけでも、農村保育の必要性は否定出来ない筈である。戦時中、戦時色の色づけで支持されてゐたものだけは消失した。然しそれは唯戦時の色づけが消失したゞけである。抑々農村保育は戦争になるずつと以前から、農村母性の保護といふ大事な使命をその始まりの時から持つて生れてゐるのである。この農村母性を保護するといふ使命は農村保育の始まりから今日までずつと貫いてゐる使命であり、決して變らない使命である筈である。農村婦人の生活は農村の労働力が充分になつても決して暇の多い生活ではない。農繁期が絶頂ではあるが、農繁期以前の時期でも決して餘裕のある生活ではない、それは農村の生活様式の封建性といふ大きな重しがのしかゝつてゐるからである。この重しから農村母性を保護するといふ事は、昔から今日まで貫いてゐる農村保育の消極的使命である。

然し、今日に於ては農村保育にはたゞこの様な消極的使命が課せられてゐるのみではない。そこには更に積極的な使命が課せられてゐる。それは農村婦人の解放といふ大きな使命である。新日本の建設の一翼としての農村はその封建性をおかなくぐり捨て、民主化する事、そして中でも婦人を解放する事によつて、その任務を達成し得る。然らば農村婦人の生活は

何によつて解放されるか、その途は封建的生活の脱却になり、就中生活の共同化といふ方向を採る事によつて進み得るものである。生活の共同化の一部として保育の共同化として農村保育の持つ任務は大きい。

この様にして、農村保育は、戦時中負はされてゐた戦時色を抑拭したが、それは決して保育そのものを否定する根據とはならない。否むしる農村母性の保護といふ在來の消極的使命から更に一步進んで農村婦人の解放といふ積極的使命を擔ふ事によつて、農村保育は新日本建設の重要な役割を負ふものである事を私共は改めて認識しなければならぬ。

三

農村保育の據つて立つ基礎の第一の方向を私共は右に検討したのであるが、私共はもつと大事な、そして私共の直接の對象である幼児の事を考へなければならぬ。農村保育が、その始まつたときから、戦争中でも、戦争後でも、そしていつの世の中でも、私共の可愛いらしい幼児達、而もどちらかといふと比較的解放されてゐて恵まれない農村の幼児達を保護し、教育するといふ大事な使命を持つてゐる事は、誰もが忘れてはならない事だし、また忘れてゐない事柄である。獨り農村保育に限らない、凡て保育の心の奥底には私共の幼な兒を守り育てるといふ強い人間愛的な心持が根強く流れてゐるのである。この心が農村の幼兒へ向つて流れるとき農村保育の營みが行はれる。

然し、今日に於ては、幼児の立場から考へても農村保育の任務は更に積極的なものを持つてゐる。農村幼児は明日の農村人の中核である。今日私共が建設しやうと願つてゐる民主日本、文化日本は今日の幼児達が成長した際に於て始めて完成される。この意味では今日の幼児は民主日本、文化日本のホープである。ほんとの民主人を育てる保育、ほんとの文化人を育てる保育が農村に行はれるとき、明日の日本建設の礎が農村に築かれつゝあるのだと言ふ事が出来るのである。

四

農村文化といふ事に就いて世上色々の事が言はれてゐる。極端な論者の中には、農村は夥しい新團の流入によつて非常に潤つて居るから、放任して置いても文化的には相當向上し得ると言つてゐるものさへある。また今日の農村の青年男女の持つてゐる文化的なものへの憧れに就いても色々と論がなされてゐる。然し、現在、私共がはつきり言ひ得る事は、一部の例外を除き、大部分の農村に於て決して正しい農村文化が芽生え育つてはゐないと言ふ事である。色々の傾向非文化運動が行はれてゐる所が間々あつても、決して正しい文化指導が行はれてゐない所がその大部分である。農村が経済的に潤つてゐても、この潤ひを正しく生かすべき文化指導は餘り行はれてゐないと言つても過言ではない。

この線を農村の経済的潤澤さと文化的貧困さとは將來の日本にとつて恐ろしいものを胎んでゐる。農村の文化指導は現

在真剣に考へられなければならない時期であると思ふ。農村文化の指導といふ事は、この稿の直接の論題ではないので、こゝにはこれ以上深く觸れない事とするが、唯私共の立場から言ひ得る事は、現に考へて來た農村婦人の解放と、農村幼児の正しい育成とによつて、正しいそして實り多い農村文化の建設の少なくとも重要な部分が達成されるといふ事である。この意味に於て、現代の農村保育は、いつまでも終戦後の虚脱の隋性の中に居るべきでなく、新しい文化日本のホープを擔つて立ち上らなければならないと思ふのである。

先生のまゝのこと

「廣い畑でせう」

「廣かないや」

「あら……」

「畑はづつと、どこまでも、どこまでも、つゞいてゐるよ」

「でも、この南瓜大きいでせう」

「もつと大きいの澤山あつた」

「どこのお話……」

「どこつて……」

「太郎さん、疎開してたのね。誰れと」

「おばあさまと。——おばあさまが、ほんとの畑を見せてあげるつて……」

「……………」